

「法蔵菩薩の因位」

中山 善雄

一

それでは、はじめに三帰依文と一緒にご唱和したいと思えます。合掌してください。

人身受け難し、いますでに受く。仏法聞き難し、いますでに聞く。この身今生において度せずんば、さらにいづれの生においてかこの身を度せん。大衆もろともに、至心に三宝に帰依し奉るべし。

自ら仏に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、大道を体解して、無上意を發さん。自ら法に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、深く経蔵に入りて、智慧海のごとくならん。

自ら僧に帰依したてまつる。まさに願わくは衆

生とともに、大衆を統理して、一切無碍ならん。無上甚深微妙の法は、百千万劫にも遭遇うこと難し。我いま見聞し受持することを得たり。願わくは如来の真実義を解したてまつらん。

中山善雄と申します。先程の勤行で二河譬の和讃を拝聴し、また感話も拝聴しました。それからこの「欲聞座」という、聞かんと欲するという言葉を聞きながら、一人思い出した方がいます。ずいぶん前にお亡くなりになりましたけれども、新潟の小千谷に、大滝さんという方がおられました。末期ガンで亡くなられた方ですけれども、宗先生から「あなたは二河譬を一生自分の課題としていきなさい」ということをいわれ、二河譬を書いた紙をトイレにも風呂場にも貼って憶念して聞いておられたことを思い出します。末期ガンですから、ほんとに最後はガリガリになって、それでも東京のほうに、毎月だったかは忘れましたが、聞きに行っておられました。最後は亡くなる一週間ほど前だったと思えますけれども、臨終説法のような形で講師の方が枕元で、寝たきりになっていた所でご法話をなさっておられました。そういう中で亡くなっていかれた。そういう姿を思い出します。現実の世界を水火二河と見出し、

その中で一筋の白道というものを見出して、聞法に最後まで命を尽くしていかれた。

そういう方の生き方を思い出す中で、改めて自分はどうであったかということが思い起こされます。

二河譬の行者は、現実を水火二河と見出して、その中で自分の歩みが問われていきます。ところが私は水火二河どころか、むしろ現実を悦楽として見出して埋没していくような、そういう日常になっていないか。その中で、様々なよきひと、先輩方の姿を見出し、聞かずにおれない心が一体どこから生まれてくるのか、改めて思い起こされるわけでありませう。

今回は「法蔵菩薩の因位」という題で話させていただきます。前回お呼びいただいた時は『観無量寿經』について割と系統的に話した記憶がございます。けれども、今回は限られた時間ということもあります。けれども、今回は新しく会座のお名前が掲げられて、法を聞かんと欲する心を尋ねる場ということもあります。それゆえ、最近感ずることを『大無量寿經』を中心に、あるいは親鸞聖人のお言葉を中心に一緒に尋ねることができたらと思っております。

「法蔵菩薩の因位」という言葉は、ご存知のように「正信偈」の、

法蔵菩薩の因位の時、
世自在王仏の所に在し
て
（『真宗聖典』第二版226頁）

というところの言葉であります。法蔵菩薩の因位については、さまざま「正信偈」の講義録・解説を見ると、法蔵菩薩が阿弥陀仏の因位だということが書いてあります。ところが、「正信偈」には「法蔵菩薩の因位」とあるわけですが、さまざま講録などを改めて確認しましたけれども、法蔵菩薩の因位とは何だということに注目している講義そのものが、ほとんどございませぬ。唯一、着目していたのは香月院深励でした。深励が、「阿弥陀仏の因位の時」ではなく、「法蔵菩薩の因位」なんだということに触れている。深励はさまざま経典を引つ張っているんですけども、しかし結局よく分からないというのが正直なところであります。

もちろん、「正信偈」の直接のお言葉は、法蔵が菩薩になる前の因位の時に、世自在王仏と会ったということが書いてあるというだけなのかもしれませぬ。けれども、やっぱり改めて深励が着目したような、「法蔵菩薩の因位とはなんぞや」という問いは大事であると思います。また、その因位と、先ほど申しましたような念仏もうさんと欲う、あるいは聞

法せずにはおれない心を表す法蔵が、どのように関わってくるのが、大事な問いとしてあるんじゃないかと思わされます。

二

改めて『大無量寿経』のお言葉を見ますと、

時に国王有しき。仏の説法を聞きて心に悦予を懐き、尋ち無上正真道の意を発しき。国を棄て、

王を捐てて、行じて沙門と作り、号して法蔵と

曰いき 『真宗聖典』第二版11頁)

というお言葉がございます。香月院深励ですけども、ここに着目してですね、

聞仏説法というのが法の字のこころ、心懐悦予というは蔵なり

というふうに記しています。これは金子大榮先生も感動して、この言葉を引いておられます。法を聞いて、その喜びというものを心に蓄えていく。それが法蔵の心であるというふうに記されています。これは単純ですが、大事です。私もそれなりに聞法の年月というものを重ねてまいりましたけれども改めて、聞法そのものが喜びであり目的となり、人間の自立

となっていくということが、ありそうで実は中々ないというのが正直な感想であります。

結局いつも何かの為に聞法している。聞法がなにかの手段とされていくことが、極めて多いです。人間において聞法そのものが目的となること自体が、実は稀なことであるかもしれません。特に今の寺院や宗門の状況の中で申しまして、社会的なものが強く要請されます。一面大切なのですが、私の場合ですと、社会的な要求に答えて、寺や念仏の教団というものが社会的に認められていきたいという、そういう名利心もわいてきます。例えば、これは課題としては非常に重要なんですけども、平和や平等ということがあります。そのことが課題となっていく自体は、とても大事で、聞法とは別ではありません。

けれども、大変微妙で難しい問題がそこにあります。ともすれば、聞法することによって、あるいは仏法によって、平和や平等を実現していくことを目指す、という思いになってきます。それがいったい何が問題なのかと思う面もあるかもしれません。けれども、やはり人間が思う、平等と平和のための聞法

というのは、これはやっぱり人間の私的目的によって私有化された聞法であります。人間によって私有化された求道や聞法、あるいは人間に私有化されてしまった仏法というものが人間を解放するということとはこれは決してあり得ないのではないか。これは大変微妙な問題です。他人の問題ではなく、私自身がそういう問題を抱いているのです。

それは本来逆なのではないか。聞法そのものにおいて人間の解放があり、人間の喜びがある。その喜びにおいて、その中において平等と平和というものがあるのではないかと思うのです。

ここがいつも必ず逆転していきます。聞法していく中にこそ、平等と平和とあるいは僧伽というものがあるにもかかわらず、僧伽の樹立のために聞法していくということにも陥っていく。その中で必ず、聞法の会座がなにか名利の争いになったり、力関係になったりして分裂していくということが必ず起こってくる。これは自分自身にも非常に耳の痛い言葉であります。聞法の集いがいつの間にかセクト化していく。自分なりの一つの教学というものを伝えていくには、世間においてはは力というものが必要になっていく。法を伝えることを実現するために仕方な

いんだという形で、いつの間にか法話していくこと、あるいは聞法していくことが自分の勢力を作っていくための手段とされていく。この誘惑は非常に強いです。特に現在ののような経済的に厳しい時代になると、その誘惑が強くなっていきます。

名利がいかに人間にとって根深いか。それはいつの間にか求道を腐食させてきます。特に自分はわずかな期間ですけれども教育、教学、そういうことに携わらせていただいていた。ここにおいては、名利がアキレス腱となります。聞法し求道し研究していく動機そのものが問えないということがある。その中で研究にしても聞法にしても、いつの間にか私的関心により腐食されていく。

そういう私自身であるからこそ、法蔵について、法は「聞仏説法」、蔵というのは「心懐悦予」という註釈が大切に感ずるのです。聞法に喜びを抱いて、静かに聞いていかれた方々がたくさんおられると思います。その方々の求道心というものに改めて学び直さなければならぬ。そういう時が来ているんだろうと思います。

もう一つ私自身思われますのは、「聞仏説法」「心懐悦予」という法蔵の因位が、ここで言えば国

王であったと記されており。文献上のことであるといふと、お釈迦様が元王族であったことに則っているということもあります。けれどもそれにとどまらない問題を示唆していると思うのです。善導大師は『観経疏』の中で、国王を注釈して「われはこれ一国の主なり。あらゆる人物みなわれに帰属す」と記しています。つまり、国王は衆生における根深い我・我所の執着を表すということ。大谷専修学院の学院長であられた信國淳先生は、これを「国王意識」という言葉でおっしゃってくださいました。誰もみな小さな国王なんだということです。どこかでその国王の座に身を据えてしまっている。おそらくこういう問題を表しているのが法蔵の因位である国王であると思うのです。ところが、その国王こそが「聞仏説法」という身になっていく。これはいったいなぜなのか。

そのことについて、系統的に經典の話をするといふよりも、最近感じていることを通してお伝えさせていきたいと思います。

これは飛躍するようですけど、『華嚴経』の文を引きます。『大無量寿経』の会座では菩薩衆が出てきて、「皆、普賢大士の徳に遵つて」（『真宗聖典』

第二版2頁）という言葉があります。この『大経』の会座の首座は普賢であると言えます。昔から、普賢菩薩の心と普賢行が大乗の究極であるといわれます。例えば『四十華嚴』では普賢の十大願というものがあって、その中には、恒順衆生という言葉があります。恒に衆生に順つていく。衆生は仏・菩薩に決して順わないわけですね。むしろどこまでも反逆していく。そういう根深い煩惱と無明を持った衆生に対して、菩薩こそが恒に順つていく。それは普賢行という、大乘の菩薩の究極であるといふふうに私は教わったことがあります。言ってしまうえば、無明の衆生の根底にある苦悩というものを、菩薩の方が聞く。すなわち聞法するのです。衆生の苦悩を法として聞き取つて、順つていく。そういう大悲を表すのが普賢の十大願にもとづく普賢行であるといわれます。この普賢行というものを念仏の心において成就し展開していくのが、実は『大無量寿経』のお心であります。念仏の心において、普賢行が法蔵菩薩の兆載永劫修行として、行じられていく。

これが『大無量寿経』のお心であり、特に『大経』の下巻はこの行の展開であるのです。ご承知のように還相回向の願には、「普賢の徳を修習せん」（『真

宗聖典』第二版20頁)という言葉もあります。『大經』下巻では悲化段のところ、三毒五惡の衆生の現実が語られていく。その衆生の現実の中に身を埋めていく、衆生に随順していく。ある意味では流転する衆生とともに運命を共にしていくという法蔵の大悲というものが展開されていく。そういう形で、念仏の心において普賢行が法蔵菩薩の行として成就していくことを語るのが、この『大無量壽經』の意であろうと思います。

『華嚴經』について、私は詳しく専門的に学んでませんけれど、やはり菩薩の教学であり、その因を尋ねていく教学であります。果を尋ねていくのではなく、限りなく因を尋ねていく教学。これが『華嚴』の心であります。そういうことでもありますので、『華嚴經』を取り上げて念仏の心の意味、言い換えれば、この「聞仏説法」、聞法せずにはおれない、そういう心の因位を尋ねてまいりたいと思います。

あまり専門的な教学の話というよりも、私自身の経験的なことも含めてお伝えしたいと思います。『華嚴經』には入法界品という、善財童子が五十三仏を尋ねていく段があります。まず初めに功德雲比丘という比丘を尋ねておりますけれども、この功德雲比

丘がこういうことをおっしゃっています、

我ただこの一切諸仏の境界を憶念して智慧の光明にて普く見る法門を得るのみ。

と。ここに念仏ということが出ております。そして、

法に安住せしむる念仏門、無量の仏を見たてまつりて法を聴聞するゆえに

と。ここに見仏、仏を見るということと同時に聞法ということが出ております。念仏の心が見仏と聞法というふうにおさえられていく。そういう一文をおさえているのが功德雲比丘の法門であります。

これは五十三の善知識の第一であります。第一ということ、一番初めということもありますけれども、それは五十三の善知識の普賢行の根底を貫くもの、ということと表現されると思います。言ってしまうと、普賢行の根底を貫くものがこの念仏であるということ、これを表している。このことを善導大師は非常に大事にされています。『観經疏』の玄義分の中で、六字釈を注釈するその直前に、この功德雲比丘が念仏一門を説いていくということ、そしてその念仏の一門というものが不退転の行を成就していくということ、これを述べております。

もう一つ、その念仏の心と普賢行が展開されて、

第二の比丘に海雲比丘というものが出てきます。この海雲比丘に私は心惹かれるんですけども、十二年間ずっと海を見ていたという比丘であります。ちよつとぼんやりした人だったと思いますね、

我この海門国に住すること十有二年、常に大海を以てその境界と為す、いわゆる大海の広大にして量なきことを思惟し、大海の甚深にして測り難きことを思惟す。(略)我この念をなせるとき、この海の下に大蓮華あり、忽然として出現せり

という言葉があります。『華嚴經』には世界海というものがあつたり、海の無量の功德というものを説いています。海雲比丘の場合、海の中から大蓮華が出てくるのを見るといふのです。ご承知のようにこの蓮華というものは仏の正覚を意味します。ただのきれいな正覚ということではなく、蓮華が諸々の汚泥に生じるように衆生の悪業煩惱というものに根ざしている、そういう覚りであると。それが海から生じてくるということです。その海の功德というのは何なんだということを改めて思うわけであります。

三

ここからはちよつと体験的なお話になつて恐縮であるわけですけども、昨年に私は京都での生活を終え、現在、新潟の海に近いところにおります。今日、久しぶりに名古屋に来て、冬でこんなに明るく太陽が出ているということに驚きました。新潟の方では十一月下旬になると、真つ暗な雲が出て強風が吹きます。海の方から真つ黒な雲が湧き出てきて、海がやはり真つ黒な色になっていく。くろい海は、ゆつくりと巨大な山のようなうねりをあげてきます。気持ち悪いぐらいの高いうねりになってくるわけです。そしてザバーンと波が碎け、しぶきが高く上がる。それをいつも眺めています。あたかも海雲比丘が海を眺めるように、私も毎日真つ黒な海を眺める。するとこの荒れた海が、衆生の無明と渴愛と煩惱がのたうちまわっていることを表していると思えてきます。

同時に雪国でもあるわけです。海辺ですから、それ程は積もらないわけですけど、それでも積もっていく。曾我先生も「食雪鬼」と、雪を食べる鬼というふうにお手紙で書いておられます。雪にうずもれて物音一つしない。人の行き来もなくなつて、来

る日も来る日もそこに閉じこもっていると、自分が化石になったような、世の中から切り離されてもう全く忘れさられて、このまま朽ち果てていくという感じにもなってきました。これは冗談抜きで新潟や秋田では、冬の暗さによるうつ病で自殺していく人が多いわけでありませう。

来る日も来る日も暗い海を見て、そういう雪の中に閉じ込められて、その中で自分の奥底にあるような深い暗いものが噴き出てくる。根深い自分の奥にある無明というものが、気候にまで現れて自分の奥底から噴き出てくるのです。

それで、ある夜のことですけれども、うつらうつらと寝るとなしにいた時に、夢のようにして、先ほど申しました暗い日本海がブワツと出てきたわけですね。そのうねりというものに自分が巻き込まれてズブズブズツと沈んでいくような感覚になっていく。その時に自分に最後出てきたのが、このままで死に切れるのかといった時に、このままで死んでも死に切れないという、そういう渴愛みたいなもの、生への執着というものが噴き出てきました。同時に、恨みと煩惱と生への執着、そういうものが無明となって噴き出てきました。

そこには、色んなものがそこにあるわけですね。名利であつたり、仏法に教えられて大切なものをいだけながら何にもできない無力な身として、何者でもない身として死んでいく。それがある意味では真宗の道ではあるわけですが、そういう自分というものを持って余し、受け取り切れない。善導大師が我々の生まれた因というものを「自の業識」という言葉でおっしゃっています。これは「結生の識」といわれ、無明と生への執着によって繰り返し巻き返し生を結んできたということを表します。そういう中で、死んでも死に切れずに流転する。仏陀は不生不滅の法を説き、それを聞きながらも、死に切れずに繰り返し巻き返し流転していく。そういう自分の実態というものが、ある時見えてきたわけですね。曠劫来流転する、そういう業識というものの中で生まれてきたのが、私の存在であると。

そのときに自分の中に生まれてきたのは、「全てものが救われても自分だけは救われぬ」という言葉でした。仏様は凡夫を含めてすべてのものを救う。凡夫の身を受け取らせるような信心を与えてくださるのが本願だということは聞いてきました。けれども、その手を払いのけて凡夫の身というも

のを断固拒否して、自分というものが何者かでありたいという、そういう執着を根深くもっている。その自分だけは救われたいんだと感じました。そういう救われ難い自分の身というものが浮かびあがってきたのです。色んな人にたすけられても、仏様がたすけようとしても、たすからない我が身があるんだと。

その言葉を想い起しながら、うつらうつらとしながら経典というものを読んでいたある時のことです。その「自分だけはたすからない」という、その「たすからない」という感覚は、「唯除」の呼びかけなのだと感じたのです。私は、私自身が「自分だけはたすからない」という声として聞き取ったのだけれども、その本質は本願による唯除であると感覚したのです。本願の心に背くものに、「唯除く」と呼びかけ、たすける本願を払いのける深い罪をもった身を知らせんとする大悲の中にあるのだと。そういうものの中で自分だけはたすからないという、妄執が知らされてきた。このことが一つあります。

もう一つ、その唯除の声として聞こえてきたと同時に、フツと生じてきたのが、「若不生者 不取正覚」という言葉です。私だけは決して救われないと

いつている、この「救われたい」ということが、実は「法蔵が正覚を取らない」ということ、つまり法蔵が衆生が迷える限り自分自身も救われたいという誓いを立てて、救われたい身となってくださっていることなんだと感じたのです。

そういう言葉は説明的でありまして、もうちよつと言うと、自分自身がこの「唯除」という声の中で、自分だけは救いから除かれていると感じた。そういう身であるというふうに呻吟し苦しんでいる、その姿そのものが、実は法蔵が「若不生者 不取正覚」という形で救われたい身となってくださっている、そのままなんだということが自分の中で感じ取られてきたのです。これはあんまり、ちよつと説明的にはおかしい話になるわけですね。もちろん曾我先生が「如来が我となる」とか、そういう言葉でいってくださっています。あるいは機の深信の主体は法蔵菩薩であると、おっしゃっているわけです。もちろんその通りであるわけですけれども、私があるとき感じたのは、もっと直接的な関係になります。自分だけは救われたいという、そういう無明煩惱や疑謗を法の中で知らされ呻吟している、その姿そのものが、「若不生者 不取正覚」という法蔵の行の因

であり、救われない者となつてくださったという法蔵の姿そのものであると。そういうことを思わされたわけでありませぬ。

こういうことを一番表現してくださったのが、曾我量深という方であると思います。私と曾我先生を一緒にするわけにもいきませんけども、曾我先生もやはり新潟の地に住んでおられた。曾我先生の求道心ということと同時に煩惱の深さというものを思わされるわけでありませぬ。ある方から聞いたことですが、どれほど学びの深い先生であつたとしても、いなかの寺で話しても村の人が聞いてくれないということがある。最後に残るのはほんとに三、四人の聞法会になつていったそうです。三、四人いれば十分だということがあるわけですが、先生には失礼ですけども、ある意味で世間的にはパツとしないような暮らしをしていくわけです。そういう中では曾我先生も本当に、朽ち果てていくような苦惱というものがあつたんだと思います。

親鸞聖人もそうであります。越後の七不思議というものがあつて、その中で逆さ竹という伝説があります。親鸞聖人が法を説いたけれども、ほとんど聞く人がいなくなつたと。そういう中で、この里に親

を亡くした子はいないかと竹をつくという伝説があります。やはり、誰も法を聞かない。そういう状況の中で自分の名利が満たされない。そういう中で悪業煩惱が積もつていく。親鸞聖人の中にも、曾我先生の中にも、そういう何ともいえないものがあつたんだと思います。

曾我先生には、「大暗黒の仏心を見よ」という文章があります。やはりこれは畢生となる文章だと思ひます。ちよつと読ませていただきますけども、

我惟うに如来は無辺の蠟燭である。彼は尽十方の光明を以て外十方を照らす。而も光の中心は又無辺の暗黒である。この無辺の暗黒とは大悲の本願である、修行である。智慧を以て光明とせば慈悲は闇黒である。如来は外面より見れば光明にして、内面は闇黒である。如来は外面より見れば光明にして、内面は闇黒である。此如来の闇黒は誠に如来光明の根本原動力にして、如来の真生命は茲に在る（中略）大悲は無明である。無縁大悲は無明の至極である。

（『曾我量深選集』第二巻 所収）

こういう言葉をおっしゃっています。これは私が、繰り返し言いたたいおる言葉であります。無縁の大

悲というものは無明の至極、究極であるというのです。如来の内なる無明というものが限りなく深いからこそ、大悲というものも限りなく深いんだと。私
が如来というわけにはいかない、法蔵というわけには
いきません、その分限ははつきりと分けなければ
ならない。けれども、私の内に法を通して知らされ
た限りない渴愛と無明があり、その深さに呻吟し
ているそのことが、実は法蔵の大悲の深さである、
法蔵の行である。同時にそのことがまた、法蔵菩薩
の法を聞かんとする、聞仏説法の心というものを生
み出していく。そういうことが思われるわけであ
ります。

四

三一問答の至心積のところです。ちよつと読ませ
ていただきますと、

一切の群生海、無始より已来、乃至今日、今時
に至るまで、穢悪汚染にして清浄の心無し、虚
仮諂偽にして真実の心無し。是を以て如来、一
切苦悩の衆生海を悲憫して、不可思議兆載永劫
に於いて菩薩の行を行じたまひし時、三業の所

修、一念・一刹那も、清浄ならざること無し、
真心ならざること無し

(『真宗聖典』第二版254頁)

これもなかなか受け取りづらい文章であります。
「是を以て」というお言葉、衆生が穢悪汚染で清浄
の心がないからこそ、それが無底であるからこそ、
法蔵菩薩の行が清浄ならざることなく、真心ならざ
ることなしという言葉でいわれるわけでありませう。
ですから、至心積では法蔵菩薩の因位というものが
こういう形で、衆生の悪業煩惱にあるということが
明かされていく。同時に、もう一つです、信樂積
の方にまいりますと、

然るに、無始より已来、一切群生海、無明海に
流転し、諸有輪に沈迷し、衆苦輪に繫縛せられ
て、清浄の信樂無し、法爾として真実の信樂無
し。是を以て、無上功德、値遇し難巨く、最勝
の淨信、獲得し難巨し

(『真宗聖典』第二版258頁)

と。ここが、私は今回感得させていただいた無明海
を表しているわけです。「諸有輪に沈迷し」と。常
没の凡愚といわれるように、無明海に常に没して、
その海に溺れていく。「衆苦輪に繫縛せられて、清

浄の信染無し、法爾として真実の信染無し。是を以て、無上功德、値遇し難巨く、最勝の浄信、獲得し難回し」と。同時に、それであるがゆえに、無量光明土に生まれんと欲することが必ず不可であるというふうに記載されていく。その不可である理由というもの

が、何を以ての故に。正しく、如来、菩薩の行を行じたまひし時、三業の所修、乃至一念・一刹那も、疑蓋、雜わること無きに由りてなり。斯の心は即ち如来の大悲心なるが故に、必ず報土の正定の因と成る (『真宗聖典』第二版259頁)

という言葉であります。なかなかいただけない言葉であります。往生不可、あるいは信じ難い、難信であることの理由というものが菩薩の修行が疑いがないものであるからであるというふうに記載されている。菩薩が無疑であること、限りなく衆生に順うものであることと、衆生の難信、往生の不可の自覚というもの

の一如となつていく。これがなかなか読めないわけであるわけですね。そして親鸞聖人は同時に、これは信心をいただいたところ、すなわち獲信において、難信であることを見出しているということも確かであります。

なかなかいただけませんけれども、やはり獲信の内実、信心をいただくことの内実、そしてその信心の歩みというものは、疑謗を見出していくことであるのでしよう。そして、この言葉で申しますと、無明の海に流転しているその疑謗と反逆の自己が自分の正体であるということを限りなく自覚していく。それ以外に獲信ということがあるわけではない。また、それ以外に法蔵の行があるわけではない。

私もは、どうしてもそこを切り離して考えます。一乗海積の中で言っても、「逆・謗・闡提・恒沙無明の海水」が、功德の海水というものに転じられるという、別のいいものになっていくと考えていく。ここが一つ、私も勘違いしてくることでもあります。むしろ、法蔵菩薩の心がまことであるからこそ、法蔵自らがその内に無明というものを孕み、流転する身となつてくださった。流転する身となつてくださったそのことは、私の方から言えば、限りなく無明の身というものに翻弄されていく、疑謗というものに苦しみながらそれを問い続けて聞法していく、そういう姿となつていく。聞法して何かになることではない。

私どもが疑謗の中で聞法し、また同時に、——清

沢先生のお母さまが、薄紙一枚が破れないという言葉をいわれた。それは、破れないということは信心を得ていないということではなくて、信心をいただいているからこそ破れないと感じ、自分の中で疑謗に苦しみ、問い続け、聞法せずにはいられなかった。実はその姿がそのまま、法蔵菩薩が無明というものを内に孕み、我らの身となつてくださり、そういう聞法者の姿となつて歩んでくださっていることなんだと思います。

ここを私どもはいつでも勘違いしていく。私で言え、やっぱり先んじて曾我量深という方が、その自己の内の根深い無明に沈潜し、そこに法蔵の大悲というものを見出して歩んでくださった。私たちにとつては、その姿そのものが法蔵因位の修行の姿であるわけです。

もう一つですね、あんまりまとまりもなく申して恐縮ですけれども、『大経』で申しますと、法蔵比丘が国王として誕生されるその前段のところに、ご承知の通り五十三仏の伝統というものが記されておられます。五十三仏の伝統自体は正宗分の初めですけれども、

次をば鸞音と名づく。次をば師子音と名づく。

次をば龍音と名づく。次をば処世と名づく。此の如きの諸仏、皆悉く已に過ぎたまいき

(『真宗聖典』第二版10頁)

と。異訳の經典では一番初めの仏、錠光如来にさかのぼつていく形で記されますけれども、この魏訳の『大経』のところでは時代がくだつていく形で記されており、そして最後に「皆悉く已に過ぎたまいき」と。言葉があります。

このお言葉のところの後に、世自在王仏と国王である法蔵菩薩が現れます。このお言葉を松原祐善先生が注釈されているもので、私にとって印象的な言葉があります。

われわれは久遠来多仏に値いながら、これらの諸仏の救済の法からもれて、流転生死の旅を続けて、今日なおも三界の火宅を出ることができない

という言葉であります。ちょうど今のような状況であります。親鸞聖人も現れて蓮如上人も現れて、そして、清沢満之先生をはじめ諸仏が現れた。ところが、「皆悉く已に過ぎたまいき」と。その救済の法から漏れて、限りなく流転しているのが私どもであります。そういう諸仏の法においては救われぬ、

救いがたき我々の無明というものをみそなわして現れたのが法蔵であると。限らない衆生の無明を法蔵自らがあえて内に孕み、共に流転する身となった。国王となつて、限らない無明において限らない大悲の行を修めていくのが、その国王という因位を持つ法蔵菩薩であろうと思います。

『教行信証』信巻では、その法蔵菩薩の行が三一問答に記されています。その先には、信巻の末巻が説かれていく。今、角田さんが廣瀬惺先生の講義を本にしてくださいと、いつも楽しみにしております。その中で廣瀬先生も少し触れられていることで、寺田正勝先生ですかね、信巻の末巻を信心の行者における歩み・生活、そんなふうに表示してくださいと、さっていると思います。今日もこの後、「信心の行者」というご法話をいただきますけれども、やはりその内実というものがですね、どういうものであるか。

最後に、そのことに触れておきたいと思えます。これは曾我量深先生が、三一問答の心を通して講義された「本願の仏地」という講義録があります。その中でおっしゃっている言葉があります。

信が正信であるか迷信であるかといふことは、

信の内に展開したところの願が本当に内に展開してあるか、或はその展開が不純粹であるかといふことによつて決定せられることであらうと思ひます。御開山は『教行信証』の上にさうひうことを明らかにする為に、金剛堅固の信心といふことを明らかに教へられてゐることと思ふのであります。

(「本願の仏地」『曾我量深選集』第五巻 所収)
 という言葉であります。曾我量深先生は「金剛堅固の信心」という言葉の内実をこういふふうには、信心が内に願として展開していく、つまり、信心の意味を限りなく尋ねていくことができる、そういうことでおさえておられるのだらうと思ひます。特に、親鸞聖人の文脈、あるいは善導大師の文脈で言うところ、様々な異見異学という、そういう外から内からの疑謗というものを通して、「信順を因とし、疑謗を縁として、信樂を願力に彰し」(『真宗聖典』第二版 476 頁)ていくという意味があるかと思ひます。そのようにして、内に内に展開して本願と対話することができるといふことが、この金剛堅固の信心といふことの、破れない信心といふことの内実としておっしゃられていると思ひます。

この金剛堅固の信心の歩みが展開されていくのが、信巻末巻の信心の行者の歩みであろうと思います。例えば、真仏弟子釈でありますけれども、

「真仏弟子」と言うは、「真」の言は、偽に對し、仮に對するなり。「弟子」は、釈迦・諸仏の弟子なり、金剛心の行人なり

(『真宗聖典』第二版278頁)

とあります。ここに「金剛心の行人」という言葉がおさえられている。

斯の信行に由りて必ず大涅槃を超証すべきが故に、「真仏弟子」と曰う (同)

と。ここに「信行」というお言葉があります。行巻の方は「行信」であるわけですね。私が口酸っぱく教えられたのは、「行」は諸仏如来につくんだと、「信」は如来よりたまわったものではあるけれども衆生につくんだと、この所行能信という分限を決して混乱してはならないということを繰り返し巻き返して教えられてきました。ですから、法蔵が衆生となるところを申しましたけれども、やっぱり仏と私との分限、あるいは菩薩と私との分限というもの混乱してはならないということは確かにある。けれども、この信巻末巻の歩みではもう一度、その分

限をわきまえつつ、むしろ私の内に法蔵菩薩の行というものが信行として展開していく。こういうことが金剛心の行人という言葉でおさえられているのであろうと思います。

けれどもそれは、私が行を展開していくのかというと、そうではないのだと思います。むしろ、金剛心そのものが行じていく、そういうものであると思います。例えば、現生十種の益というところでは、

金剛の真心を獲得すれば、横に五趣八難の道を超え、必ず現生に十種の益を獲

(『真宗聖典』第二版273頁)

と。その九つ目が、「常行大悲の益」という言葉であります。これは宗正元先生がこの常行大悲というお言葉に注目されて、同時に信巻にあります「大悲を行ずる人」(『真宗聖典』第二版281頁)という、そういう言葉を大変大事になさっています。お若い時に曾我量深先生のことを「大悲の人」と呼ばれて、その念仏申す生活、聞法する生活、その道を一筋に生きる人がそのまま実は大悲を行ずる人であるということを、宗先生は非常に大事にしていかけたことが思い起こされます。

では、なぜ信心の行者がそのまま常行大悲の益を

行じていくことになるのか。そういうことが繰り返して思わされるわけがあります。私自身、さまざまなかコンプレックスがあります。例えば、小さい時からほんとに何もできない身でした。内気であったり、外に向けて何かをしていくことが出来ない身があるわけですね。そういうできない身であるということ、無力であること、無能であることにいつもコンプレックスを持ち、そういう自分が何者でも出来ない。要するに「行ができない」という問題があるのです。今でも、本当に何の役にもたっていない。寺に帰って門徒の方と親しめるかと思ったら親しむこともできない。力にもなれない。先祖伝来の、わずかな寺というものが、親鸞聖人の教えを売って、それを名利として貪っているのです。曾我量深先生が、越後というのは鬼の住むところといいましたけれども、その、貪って生きている者というのが、自分の生きる実感です。無明と渴愛とを貪って生きている。

けれども、そういう貪りと無明の中で流転する身を、繰り返し聞法の中で知らされて、翻弄されていく。そういう救われぬ身を生きていくことそのものが実は大悲を行ずることなのだと思うのです。

五

もう救われてしまった人ほど冷たいものはない。これは、皆さんも生活経験でも分かると思います。救われてしまつて割り切つてしまつた人ほど自分にとつて無縁なものはない。今の私にとつて励みになり、共に自分のそばにいて苦しんでくださる、その姿というのが、一つは、曾我量深先生です。曾我先生が新潟に戻られて、食雪鬼といわれるように食つて生き、「大暗黒の仏心を見よ」といわれるように無明を見つめ、しかも、その無明と大悲が一つなんだというところまで展開していった、その曾我先生の姿に「大悲の人」を感じるのです。

もう一人は正親含英先生という方がおられます。大谷大学の学長までなされた方ですけれども、名畑應順先生が記された追悼文の中では、いつも谷大の先生、学校の先生を辞めようとしておられたとあります。正親含英は数学者、先生というよりも、一人の人であり、信心の行者であつたと。大谷大学が大きくなつて宗門の外に出ていく人も多い中で、卒業の祝辞において、私は諸君がそれぞれの田舎の寺に

帰って、一筋に、親鸞聖人の絵像の前で鑿を打って
くれることを願うと、そういう言葉を送ったといわ
れます。ある意味では、田舎の一人の坊さんとして
身を徹していかれた。一人の名もない凡夫というこ
とになるのかと思います。しかも、自分の、名もな
い、朽ち果てていくようなそういう身に対して、寂
しさと苦悩というものを赤裸々に語る。その凡愚の
身において念仏と大悲があるということを繰り返し
記しておられます。

我々はその身を据えられないです。だから、色
んなことをやってみようと思います。新しいことをや
って、時代に応じていこうとします。それを全部悪
いことだとは言いませんけれども、そういう、田舎
の寺の生活、あるいは名もない平凡な生活、そこに
脈打つような何者でもあれなような情けない自分
の名利心と煩悩というものに身を据えられません。
だからこそ目をそらして色んなことをやっっていこう
とする。色んなことをやっって成功した方も、それは
それで大事な働きをなさっていると思います。でも、
その成功者は自分にとっては何力にならないというこ
とがあります。

煩悩の身に身をすえて、聞法の中で呻吟してい

れて、その身と法蔵が一つであることを証ししてく
ださった、その方が自分にとつては大悲を行ずる人
であり、その姿はそのまま法蔵菩薩の常行大悲とい
うものの現れであると感じます。

ですから、その先輩方の身を念ずる時に私自身も、
繰り返し巻き返し、思い上がり何者かであろうとす
るその聞法姿勢を、よき人よき友の聞法する姿に翻
されて、無明煩悩の身に、ある意味では叩きつけら
れていく。その自分の歩みそのものが、図らずして
です、私が大悲を行ずるのではなくて、図らずして
常行大悲となるんだと。「する」ではなくて、「な
っていく」のだということだと思います。

聞法ということが非常に個人的なものと思われ、
私的なものと思われている。けれども、そうじゃな
いんだと。無縁の大悲というものを行ずるものであ
り、その身を通して大悲を公開していく。そういう
者であるということは、これはやっぱり信巻の末巻
などを通して明らかにしていかなきゃいけないこと
かなということをいま思っています。

阿闍世の場合ですと、「未生怨」という、生まれ
る以前に、この世界と自分の生まれというものに深
い怨憎、怨みというものを持って生きている。それ

は我々そのものの身であります。その身を持て余し、それを受け取れず、それをごまかして「善見」という、善いものであるうとして生きていく。そういう身が、言ってしまったえば、五逆の身であり、誹謗正法の身である。その身が、「ただ除く」という形で除かれていく。その大悲を記すのが信巻の末巻であるわけです。その逆謗の身が阿闍世の中で問題となつて、身の瘡が生じ、呻吟し、

大王。安んぞ眠ることを得んや不や

（『真宗聖典』第二版 292 頁）

と、眠れなくなっていく。自分の罪の意識と、逆謗というもので眠れない。

この眠れないというのは非常に大事で、これは今でも私は大事にしていますけれども、パスカルが『パense』の中で「イエスの秘儀」という一文を記しています。その中で、

イエスはこの世の終わりまで苦悩するであろう。

だからこそ我々はその間、眠ってはならないといっている。我々は眠りにつきまです。救済に陶醉し、自分が何者であるかのように思い、そういう思いの中で救われてしまう。いつの間にか二乗に退転して、非常に冷たい者になっていきます。しまいに

は聞法しなくなっていくということもある。その自分が救われない身であるということを繰り返して教えられ、そういう中で疑惑の炎を絶やさないと、ところが大事なんだと。その疑惑の炎を絶やさずに、眠らないということが、はからずして実は大悲の炎というものを燃え上がらせることなのだと思います。こういうことが表されているのが信巻の象徴的な、真仏弟子釈のちよつと後ですね、これはちよつと危ない言葉ではあるんですけども、

「是心作仏」は、言うところは、心、能く作仏するなり。「是心是仏」は、心の外に仏無さずとなり。譬えば、火、木より出でて、火、木を離るることを得ざるなり

（『真宗聖典』第二版 275 頁）

と。この「木」というものが我々の悪業煩惱であり、無明であるわけです。これを菩薩の大悲と智慧によって燃やされていくんだと。燃やされるところには当然、苦悩というものがある。けれどもその苦悩の炎というものを絶やさず、我々の内に疑謗の炎というものを絶やさないと、実が智慧と大悲の炎を燃え上がらせて、常行大悲というふうになってくることなんだということでしょう。ですから、

「大王。安んぞ眠ることを得んや不や」という阿闍世の疑謗と苦悩が、そのまま「阿闍世の為に無量億劫に涅槃に入らず」（『真宗聖典』第二版295頁）という菩薩の慈悲になるのです。「涅槃に入らず」ではなく「涅槃に入れず」、涅槃に入れない。つまり、眠りにつかない仏の大悲そのままなんだと。

これを我々は分けて考えます。阿闍世というどうしようもない凡夫がいて、それを助ける為に仏が大悲に入らないというふうに通じてしまうけど、そうではないだろうと思います。疑謗の中で苦しみ、安逸の眠りにつけない阿闍世の姿そのままが実は阿闍世王のために涅槃に入らず、「入らず」というよりも入れない、眠れない菩薩の大悲であるのです。これは菩薩の大悲というものの表れなんだと。ここを分けてしまうとところに我々の非常に根深い、聞法の聞き方の危うさがある。

もうまとまりがつきませんけれども、我々が繰り返して、この救われない身というものを聞いていく。それが決して暗いことではなく、そしてまた聞法というものが個人の道ではなくて、聞法していくことがそのまま常行大悲の身となり、苦しんでいる人々にとってその傍にたたずむような法蔵の行となつて

いく。そこに、「法蔵魂」というものが荘嚴されていく。そういうことを思わされるということで、私のお話を終わらせていただきます。

感話の延長のようになって恐縮ですが、最後までお聞きくださりありがとうございました。

【質疑応答】

A

清沢満之先生が「自己とは何ぞや」ということを非常に深く追及されている感じがしました。そこがやはり聞法の重要な点でないかなと、私自身は思っておるんですけど、永久に分からないことですけど。

中山

ちよつと話が飛ぶかもしれませんが、実はその清沢先生の「自己とは何ぞや」ということが最近、割と批判的に語られる傾向が強いです。というのは、自己とは何ぞやという中で閉塞して、社会が見えなくなつていくというような形で批判的に捉えられたりするんです。しかし、果たしてそんなに単純なかなという気はするんですね。清沢先生が生きられた時代というのは日清戦争がありました。そういう

中で仏教に対する眼差しが厳しかったということもあつたと思います。報国ということが要求されることがあつたと思うのです。

そういう厳しい状況の中でも自己を問うということに徹していかれたということには、むしろそういう社会的なもの、例えば戦争であろうと、差別であろうと、そういうものをつくり出していくような根源的なものを見つめたのだと思います。今で言えば、社会構造ということがいわれますけれども、構造の問題というよりも、構造をつくり出していくような人間の問題というのがもつとあるはずです。構造的なもの、社会的なものが解決されていっても、その構造をつくり出すような人間の根源的な無明というのは解決されていかない。そこまで見据えておられたのが清沢先生じゃないかと思うんですね。だから、そこをもうちよつときちんと見ていかないといけないということを思うんです。ちよつと余計なことになりましたけれどもね。

B

レジュメの一番最後に「涅槃に入れず」とありますが、これは中山先生がそのようにされたんですか。

中山

はい。これは「涅槃に入らず」ではなく、「入れず」、入れないんだと。

B

ここは、すごいなと思いました。

C

法蔵菩薩がうちに無明を孕み、流転の身となつてくださる、という表現をされましたけれども、ちよつとその意味が分からない。なぜ国を棄て王を捐えている法蔵菩薩が流転の身となつていえるといえるのでしょうか。

中山

經典は、ある意味では物語ですからね、因から果に向かつていく形ですけれどもね。曾我量深先生の言葉を通してこういうことを言うんですが、法蔵が願を發して成就して阿弥陀如来と成つたと、けれども、大悲が成就するということは、仏が菩薩に成り下り、衆生とともに流転するんだということなんです。そういうものを感得していった者の歴史ということがあつて、そういう、うちに孕んだ無明というものを物語として表すと、法蔵因位としての国王というものになつていくという、そういうことで自分なんかは物語を解釈していく感じなんです。

C

法蔵菩薩というと、二河白道で言えば「清淨願往生心」というイメージを持っていました。ということは白道、火にも水にも侵されないというようなイメージを持っていました。流転する我々に応じているということであれば分かるんですけど、それが流転する身となる、煩惱自体になるというふうに、無明の象徴のような形で語られると、ちよつとそのようには思っていなかったもので、その辺りがどうなのかなあと思ひまして。

中山

そうですね、そこはきわどいですよね。凡夫の煩惱と如来の願心というものを一つにしてしまつてはいけないということはやつぱり大事なことだと思います。だけでも、また別にしてしまうとおかしい話にもなつていくと。これは、話はちよつと飛びますけれど、唯識などではマナ識というものが転じられて平等性智と成る。また流転ということという、菩薩の分段生死に対して変易生死といわれますけれども、菩薩が衆生とともに流転する身となつていくというところが段階としてやつぱりあるんですよね。では、自分から、自分の煩惱がイコール法蔵だとい

うふうに言つてしまつてこれはおかしくなつちゃうわけなんだけれども、そういうふうになつてくたさつているものがある」という点が大事だと思ひます。ここが非常にきわどい言い方で、私がそうするとか、私がそうあるというよりも、そう「なつてくたさつているものがある」という、そこがきわどいところだと思ひますよね。

C

曾我量深先生のものを読んで、法蔵菩薩とは何ぞや、ということを考える時に、曾我先生もそうですし、他の先生も色んな表現をされている中で、それをどう受け取つていけばいいのか、言葉になつていく中でまた考えさせられるんですけども、その中で、流転する身となるという言い方でいいのかと思ひました。自分自身のこと、例えば、真我とか、我を生きてくださる主体とかということ、流転する身となつてくださるといふこと、ちよつとやつぱり違うんじゃないかなといふか、厳密にそこをもう少し考えることができるんじゃないかなといふことを思ひましたので質問しました。

中山

流転する身 // である”といふとちよつと危ない。

流転する身 “となる”。この “なる” のところが
もう少し、分限というものを明確にしながらやっ
ていかないといけないところだと思えますね。

C
ありがとうございます。

(二〇二四年二月二日 名古屋教務所議事堂)